

琉球列島から得られたクロタチカマス科魚類 3 種 (アオスマヤキ・エラブスマヤキ・オオメカゴカマス) の記録

加瀬出帆¹・出羽優風²・中川龍一³・本村浩之⁴

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学水産学部水産学科 (鹿児島市)

k7517729@kadai.jp

² 鹿児島大学大学院連合農学研究科 (鹿児島市)

³ いであ株式会社 名古屋支店 (名古屋市)

⁴ 鹿児島大学総合研究博物館 (鹿児島市)

motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 24 March 2026

Revised 29 March 2026

Accepted 30 March 2026

Published 01 April 2026

DOI 10.34583/ichthy.66.0_1

Izaho Kase, Yuna Dewa, Ryuichi Nakagawa and Hiroyuki Motomura. 2026. Records of three snake mackerels, *Epinnula rex*, *Neopinnula minetomai*, and *Rexea nakamurai* (Gempylidae), from the Ryukyu Islands. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 66: 1–7.

Abstract

A total of 11 specimens of three snake mackerels (Gempylidae) were collected from the Ryukyu Islands, Japan: *Epinnula rex* Ho, Motomura, Hata and Chiang, 2022 [a single specimen, 481.1 mm standard length (SL), Amami-oshima island, Amami Islands]; *Neopinnula minetomai* Nakayama, Kimura and Endo, 2014 (three specimens, 258.8–305.7 mm SL, Yokoate-jima and Takara-jima islands, Tokara Islands); and *Rexea nakamurai* Parin, 1989 (seven specimens, 258.7–378.9 mm SL, Taira-jima and Yokoate-jima islands, Tokara Islands; Amami-oshima island, Amami Islands; and Okinawa-jima island, Okinawa Islands). The three species were firstly recorded from each collected locality. In addition, the presently reported three specimens of *N. minetomai* represent the third specimen-based record of the species.

クロタチカマス科魚類は主に 200 m 以深の深海域に生息することが知られており (Nakamura and Parin, 1993; 中坊・土居内, 2013), 日本国内から 13 種が知られている (中坊・土居内, 2013; Nakayama et al., 2014; Ho et al., 2017, 2022). 本科魚類の多くは一般的な底曳網漁の対象になりにくいことから, 採集例が少なく, 生息状況には不明な点が多い (荻野・松沼, 2018).

2019 年 8 月から 2025 年 12 月の間に, 琉球列島から 3 種のクロタチカマス科魚類, アオスマヤキ *Epinnula rex* Ho, Motomura, Hata and Chiang, 2022 (1 標本: 奄美大島),

エラブスマヤキ *Neopinnula minetomai* Nakayama, Kimura and Endo, 2014 (3 標本: 横当島・宝島), およびオオメカゴカマス *Rexea nakamurai* Parin, 1989 (7 標本: 平島, 横当島, 奄美大島, および沖縄島) が採集された。これらの標本は各海域における 3 種の初めての記録であり, トカラ列島から得られたエラブスマヤキについては本種の 3 例目の記録となるため, ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は Hubbs and Lagler (1958) と Nakamura et al. (1983) にしたがった。尾鰭上葉長・下葉長, および体高の計測は Nakayama et al. (2014) にしたがった。骨質の両眼間隔の計測は Roberts and Stewart (1997) にしたがった。アオスマヤキの側線鱗数の計数は Ho et al. (2017) にしたがった。標準体長は体長または SL と表記し, 体部の計測はノギスを用いて 0.1 mm までおこなった。生鮮時の体色の記録は, ホルマリン固定の前に撮影された標本のカラー写真に基づいて記載した。標本の作製, 登録, 撮影, および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に保管され, 上記の生鮮時の写真は同館データベースに登録されている。

Epinnula rex Ho, Motomura, Hata and Chiang, 2022

アオスマヤキ

(Fig. 1; Table 1)

標本 KAUM-I. 178534, 体長 481.1 mm, 鹿児島県奄美大島西方沖 (28°37'10"N, 128°36'90"E), 水深 300 m, 2022 年 12 月 14 日, 村田 勉。

記載 計数形質と体各部の体長に対する割合を Table 1 に示す。頭長は第 2 背鰭最長軟条の 2.8 倍, 胸鰭長の 1.7 倍, 腹鰭長の 3.2 倍。体は側扁し, 細楕円形。体背縁の輪郭は吻端から第 1 背鰭第 4 棘基部まで緩やかに上昇した後, 第 2 背鰭起部まで体軸とほぼ平行となり, そこから尾鰭基底上端まで緩やかに下降する。体腹縁の輪郭は下顎前端から腹鰭起部まで緩やかに下降した後, 臀鰭起部まで体



Fig. 1. Photograph of *Epinnula rex* (KAUM-I. 178534, 481.1 mm SL) from Amami-oshima island, Amami Islands, Ryukyu Islands, Japan.

軸とほぼ平行となったのち、そこから尾鰭基底下端まで緩やかに上昇する。眼は大きく、円形。眼隔域は平坦。鼻孔は2対で、両鼻孔は眼の前縁前方にある。前鼻孔は円形で、後鼻孔は裂状で細長い。上顎後端は眼窩前縁を越えるが眼窩中央には達しない。肛門は楕円形。口裂は大きく、体腹縁は滑らかで骨質隆起を欠く。第1背鰭起部は前鰓蓋骨後端と主鰓蓋骨後端の中間地点の直上にあり、第1背鰭基底後端は肛門の直上にある。第2背鰭起部は臀鰭起部よりやや前方にあり、第2背鰭基底後端は臀鰭基底後端よりわずかに前方にある。第2背鰭と臀鰭は鎌状で、いずれも前部が伸長する。胸鰭基底上端と下端は、それぞれ第1背鰭第1棘と第2棘、ならびに第3棘と第4棘基部の中間地点の直下に位置する。胸鰭後端は第1背鰭第9棘基部直下に達する。腹鰭起部は第1背鰭第5棘基部の直下にある。たまたんだ腹鰭後端は、第1背鰭第8棘と第9棘基部間の直下に達する。小離鰭はもたない。尾鰭は二叉形を呈し、深く湾入する。側線は2本あり、胸鰭上方（第1背鰭第6棘基部直下）で分枝する。上方の側線は分枝点からそのまま体背縁にそって尾鰭まで伸びる。上方側線鱗数は前部（側線始部から分枝点にかけて）において22、後部（分枝点以後）において198（総数は220）。下方の側線は分枝後、体側中央付近から胸鰭後方にかけて頭部方向に大きく湾曲したのち、体腹縁に沿って尾鰭まで伸びる。下方側線鱗数は垂直部において74、直走部において179（総数は253）。

色彩 生鮮時（Fig. 1）— 体は一様に青みがかった銀褐色。第1背鰭、胸鰭、および腹鰭は黒色。胸鰭後端付近に約5個の黒色斑をもつ。第2背鰭と臀鰭は灰色。尾鰭は全体的に黒味があり、上縁・下縁付近が濃い黒色で、尾鰭中央は白みを帯びる。

分布 本種は日本、台湾、マリアナ諸島（グアム）、ハワイ、ニュージーランド、およびオーストラリア東岸から記録されており（Ho et al., 2017; 畑, 2024; Tea et al., 2025; Myers et al., 2025）、日本国内においては、茨城県沖、千葉

県館山市沖、神奈川県小田原市沖、静岡県（遠州灘）、三重県（紀北町沖、尾鷲市沖、紀伊大島、および熊野灘）、高知県、鹿児島県（平島と与論島）、沖縄県（石垣島）、および東京都（沖ノ鳥島）から報告されている（久保ほか, 2012; 中坊・土居内, 2013; 岡本, 2014, 2019; Hata and Motomura, 2016; 山田ほか, 2020; 三澤ほか, 2020; Ho et al., 2017, 2022; 本田ほか, 2024; 笹木, 2025; 甲斐・御所, 2025）。なお、Ho et al. (2017) は KAUM-I. 165071 の産地を愛知県御前崎沖の遠州灘（34°22'N, 138°11'E）と表記したが、御前崎沖であることや緯度経度の位置から、正しくは静岡県（遠州灘）であると考えられる。本研究によりアオスミヤキの奄美大島近海における分布が確認された。

備考 本標本は側線が2本あり、胸鰭上方で分枝すること、第1背鰭が16棘、第2背鰭が1棘18軟条であること、臀鰭が3棘15軟条であること、頭長が第2背鰭最長軟条長の2.8倍、胸鰭長の1.6倍、および腹鰭長の3.2倍であること、側線下方分枝の垂直部の側線鱗数が74、平行部の側線鱗数が179であること、および臀鰭起部が第2背鰭起部直下より後方にあることなどの特徴が、Ho et al. (2017, 2022) の示したアオスミヤキ *Epinnula rex* の特徴と一致したため、本種に同定された。なお、アオスミヤキは唯一の同属他種である *Epinnula magistralis* Poey, 1854（大西洋に分布）と比較して、第1背鰭棘条数が17–18（*E. magistralis* では15–16）、臀鰭軟条数が15–16（13–14）、下方側線鱗数が247–268（285–330）であることなどの特徴から識別される（Ho et al., 2017）。

Ho et al. (2017) は汎世界的に分布すると考えられていた *E. magistralis* の分類学的再検討を行い、太平洋に分布する種を *Epinnula pacifica* Ho et al., 2017 として新種記載した。しかし、名義名 *E. pacifica* は国際動物命名規約に基づき、現在 *Neopinnula orientalis* (Gilchrist and von Bonde, 1924) (トウヨウカマス) の新参異名とされている *Epinnula orientalis pacifica* Grey, 1953 と同名関係にあるとみなされた [動物

命名法国際審議会, 2005 (条 45.2); Ho et al., 2022]. なお, 同名関係にあるこれらの2名義種は現在異なる属に帰属されているものの, *E. orientalis pacifica* Grey, 1953 のみが有効とされる [動物命名法国際審議会, 2005 (条 52.2); Ho et al., 2022]. これらのことから Ho et al. (2022) により *E. pacifica* Ho et al., 2017 に対し, 新たに置換名 *E. rex* が提唱された。

本標本の上方側線鱗の総数 (220) は Ho et al. (2017) の示した値 (185–208) よりわずかに大きかったが, 本標本の前部上方側線鱗数 (22) と後部上方側線鱗数 (198) は Ho et al. (2017) が示した計数値の範囲内であった。また, 本標本は胸鰭後方付近に約5個の黒色斑をもち, この特徴は過去の太平洋産アオスミヤキに関するほとんどの文献では述べられていない (Kamohara, 1938; 中村, 1984; Ho and Yee, 2012; 岡本, 2014, 2019; Stewart, 2015; Hata and Motomura, 2016; Ho et al., 2017; 山田ほか, 2020; 三澤ほか, 2020; Myers et al., 2025; 笹木, 2025)。しかし, Matsubara

and Iwai (1952) は, 1標本のアオスミヤキ (体長 188 mm, 尾鷲沖, 熊野灘; *E. magistralis* として報告) に基づき, 本研究で用いた奄美大島近海産の1標本と同様の胸鰭の黒色斑について記載している。

アオスミヤキの国内における記録は「分布」の項において記述した通りである。したがって, 本研究の1標本は本種の奄美大島からの初めての記録となる。

***Neopinnula minetomai* Nakayama, Kimura and Endo, 2014**

エラブスミヤキ

(Fig. 2; Table 1)

標本 3個体: KAUM-I. 156095, 体長 300.4 mm, 鹿児島県トカラ列島横当島沖 (28°47'N, 128°50'E), 水深 600 m, 釣り, 2021年3月19日, 白間秀和; KAUM-I. 187291, 体長 305.7 mm, 鹿児島県トカラ列島宝島沖 (29°11'N, 129°09'E), 2023年7月13日, 前川隆則; KAUM-I.

Table 1. Counts and measurements of three species of the family Gempylidae from the Ryukyu Islands.

	<i>Epinnula rex</i>	<i>Neopinnula minetomai</i>	<i>Rexea nakamurai</i>
	<i>n</i> = 1	<i>n</i> = 3	<i>n</i> = 7
Standard length (SL, mm)	481.1	258.8–305.7	258.7–378.9
Fork length (mm)	514.9	281.1–333.6	273.1–399.5
Counts			
Dorsal-fin rays	XVI-I, 18	XVI-I, 19 or 20	XVIII-I, 13 or 14 + 2
Anal-fin rays	III, 15	III, 19–21	I, 13 + 2
Pectoral-fin rays	13	15	13
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5	–
Measurements (% of SL)			
Head length	33.3	32.6–35.0 (33.9)	31.1–33.0 (32.0)
Orbit diameter	8.6	10.7–12.7 (11.9)	8.7–9.7 (8.9)
Fleshy interorbital width	9.5	8.8–9.5 (9.2)	8.3–9.4 (8.7)
Bony interorbital width	5.3	7.0–7.1 (7.1)	4.2–5.0 (4.6)
Body depth at pelvic-fin base	22.1	27.5–29.5 (28.8)	–
Body depth at anal-fin origin	20.2	27.7–29.6 (28.6)	14.6–15.9 (15.3)
Pectoral-fin length	20.0	17.8–17.9 (17.9)	12.4–13.6 (13.0)
Upper caudal-fin lobe length	25.4	24.1–26.6 (25.1)	17.1–18.7 (18.2)
Lower caudal-fin lobe length	21.5	25.1–26.9 (25.8)	16.9–18.4 (17.6)
Snout length	11.1	10.2–11.4 (10.7)	11.3–12.6 (12.0)
Postorbital length	14.4	12.0–12.3 (12.1)	11.0–12.1 (11.3)
Upper-jaw length	15.0	13.9–14.5 (14.2)	12.9–13.7 (13.4)
Suborbital width	1.4	0.9–1.2 (1.1)	1.0–1.5 (1.2)
First pre-dorsal-fin length	28.0	32.0–33.2 (32.7)	29.1–31.2 (29.9)
Second pre-dorsal-fin length	70.0	69.7–70.7 (70.2)	74.6–75.8 (75.2)
First dorsal-fin base length	43.3	38.6–38.7 (38.7)	45.0–47.3 (46.0)
Second dorsal-fin base length	18.8	21.3–21.9 (21.7)	18.1–19.5 (18.9)
Pre-pectoral-fin length	30.6	31.9–33.5 (32.5)	30.7–33.0 (31.9)
Pre-pelvic-fin length	40.4	41.7–42.6 (42.0)	–
Pelvic-fin length	10.4	8.8–11.4 (10.2)	–
Pre-anal-fin length	73.4	69.6–71.7 (70.5)	75.0–76.6 (76.0)
Pre-anus length	68.6	65.9–66.8 (66.4)	71.0–73.4 (72.5)
Anal-fin base length	16.8	22.5–23.7 (23.0)	17.6–19.3 (18.5)
Abdominal length	35.0	28.9–30.3 (29.8)	–
Tail length	30.4	34.6–36.1 (35.3)	25.2–26.9 (26.1)
Caudal-peduncle length	13.9	11.1–12.6 (12.1)	6.9–8.1 (7.4)
Caudal-peduncle depth	5.4	5.7–6.4 (6.1)	4.2–4.8 (4.4)
Caudal-peduncle width	3.5	3.7–3.8 (3.8)	2.4–3.0 (2.8)



Fig. 2. Photograph of *Neoepinnula minetomai* (KAUM-I. 187291, 305.7 mm SL) from Yokoate-jima island, Tokara Islands, Ryukyu Islands, Japan.

187895, 体長 258.8 mm, 鹿児島県トカラ列島近海, 2023年7月26日, 前川隆則.

記載 計数形質と体各部の体長に対する割合を Table 1 に示す. 体は側扁し, 細楕円形. 体高は臀鰭起部 (KAUM-I. 187291 では腹鰭起部) において最大. 体背縁の輪郭は吻端から第1背鰭第5棘基部にかけて緩やかに上昇し, 第1背鰭第5棘基部から第1背鰭第13棘基部にかけては体軸とほぼ平行となる. そこから第2背鰭起部にかけてわずかに上昇した後, 第2背鰭基底後端にかけて下降する. 体腹縁の輪郭は下顎先端から腹鰭起部にかけて下降し, そこから臀鰭起部までは体軸と平行となる. その後臀鰭起部から臀鰭基底後端まで上昇する. 吻端は尖り, 下顎先端は上顎よりやや前方に突出する. 眼は巨大で円形. 眼隔域は平坦. 鼻孔は2対で, 眼の前縁前方に位置する. 前鼻孔は円形で前面を向き, 後鼻孔は裂状で細長い. 前鰓蓋骨後下縁は鋭角をなす. 肛門は楕円形. 口裂は大きく, 上顎後端は瞳孔の前縁直下に達する. 上顎前部には大きな犬歯状歯 (KAUM-I. 187895 では3対, KAUM-I. 156095 では2対, KAUM-I. 187291 では1対) をもつ. 下顎に発達した犬歯状歯はない. 体腹縁は滑らかで, 骨質隆起を欠く. 第1背鰭起部は鰓蓋後端より前方に位置する. 第1背鰭基底後端は肛門の直上よりやや後方にある. 第1背鰭は第4-7棘が最長. 第1背鰭背縁は第4棘にかけて上昇した後, 第7棘から緩やかに下降する. 第2背鰭と臀鰭は鎌状を呈し, いずれも前部が伸長する. 第2背鰭起部は肛門の直上よりわずかに後方に位置する. 胸鰭基底上端と下端はそれぞれ第1背鰭第1棘と第2棘, ならびに第3棘と第4棘基部の中間地点の直下にある. 胸鰭の後端は第1背鰭第8棘と第9棘基部の中間地点の直下に達する. 腹鰭起部は第1背鰭第6棘基部の直下に位置する. 臀鰭起部は第2背鰭起部直下, またはそれよりわずかに後方に位置する. 小離鰭はもたな

い. 尾鰭は二分形を呈し, 深く湾入する. 側線は二本あり, 鰓蓋の上端から起始する. 上方の側線は体背縁に沿ってはしり, 尾鰭基部まで続く. 下方の側線は主鰓蓋後縁に沿って下降し, 胸鰭基部付近で後方にやや湾曲したのち, 体腹縁付近に達する. そこから尾鰭に向かって体腹縁に沿って上方側線より長く伸びる.

色彩 生鮮時 (Fig. 2) — 体は一様に銀白色を呈し, 体背面は黒みがかかる. 第1背鰭後縁は黒色を帯び, 第1背鰭第2-5棘間の鰭膜に黒色斑がある. 胸鰭は黒色. 尾鰭は上葉・下葉ともに黒みを帯びる. 第1背鰭, 胸鰭, および尾鰭を除く各鰭は白色半透明. 固定標本の口腔内は均一に黒色.

分布 本種は大隅諸島口永良部島 (タイプ産地) と台湾からのみ記録されている (Nakayama et al., 2014; Ho et al., 2025). 本研究により, 新たにトカラ列島横当島と宝島における分布が確認された.

備考 記載した3標本は眼が大きく, 眼窩径が吻長とほぼ等しく, 両眼間隔より大きいこと, 眼窩上縁が頭部の体背縁にかかること, 肉質両眼間隔幅が眼窩径より小さいこと, 前鰓蓋骨の後下縁が鋭角をなすこと, 第2背鰭と臀鰭が鎌状を呈すること, 下顎に発達した犬歯状歯がないこと, 下方側線の前部が主鰓蓋に覆われること, 口腔内が均一に黒色であることなどの特徴が Nakayama et al. (2014) の示したエラブスミヤキ *Neoepinnula minetomai* の特徴と一致したため, 本種に同定された. 本研究における各部の計測において, 眼窩径は Nakayama et al. (2014) で示された値 (10.6-10.9) よりわずかに大きかった (10.7-12.7). これらの差異は既報のエラブスミヤキの計測値が Nakayama et al. (2014) と Ho et al. (2025) によって報告された3標本のみに基づき, 本種の種内変異を網羅できていないことによると考えられる.



Fig. 3. Photographs of *Rexea nakamurai* from the Ryukyu Islands. A: KAUM-I. 138125, 258.7 mm SL, Okinawa-jima island, Okinawa Islands; B: KAUM-I. 160157, 311.1 mm SL, Amami-oshima island, Amami Islands; C: KAUM-I. 189285, 303.9 mm SL, Taira-jima island, Tokara Islands.

エラブスミヤキの国内における記録は「分布」の項において記述したとおりであり、本研究の3標本は本種のトカラ列島からの初めての記録となるとともに、本種の3例目（4–6個体目）の記録となる。

***Rexea nakamurai* Parin, 1989**

オオメカゴカマス

(Fig. 3; Table 1)

標本 7個体：KAUM-I. 138125, 体長 258.7 mm, 沖縄島近海, 那覇市泊いゆまちにて購入, 2019年8月29日, 桜井 雄; KAUM-I. 160157, 体長 311.1 mm, 鹿児島県トカラ列島横当島, 水深 290 m, 釣り, 2021年9月9日, 伊豆味隆臣; KAUM-I. 161455, 体長 304.8 mm, 鹿児島県トカラ列島横当島 (28°47'N, 128°59'E), 水深 180–200 m, 2021年9月23日, 釣り, 境喜美夫・境 昭一;

KAUM-I. 162653, 体長 378.9 mm, 鹿児島県奄美大島近海 (28°30'N, 128°56'E), 水深 320–350 m, 2021年11月17日, 釣り, 村上孝士; KAUM-I. 189284, 体長 287.2 mm, KAUM-I. 189285, 体長 303.9 mm, 鹿児島県トカラ列島平島南東沖 (29°40'N, 129°33'E), 釣り, 2023年8月21日, 金井耀大; KAUM-I. 222997, 体長 308.2 mm, 鹿児島県奄美大島近海 (28°28'N, 129°28'E), 2025年12月30日, 前川隆則.

記載 計測形質と体各部の体長に対する割合を Table 1 に示す. 体は側扁し, 短剣状. 体背縁の輪郭は吻端から眼の上縁にかけてまで上昇し, 眼窩上部でわずかに隆起した後, 第1背鰭起部まで緩やかに上昇する. その後第2背鰭起部まで体軸とほぼ平行になり, 尾鰭基底上端にかけて緩やかに下降する. 体腹縁の輪郭は胸鰭後端直下まで下降した後, 尾鰭基底部にかけて緩やかに上昇する. 眼は大きく, 円形. 口は大きく, 上顎後端は眼窩前縁を越えるが眼窩中

央には達しない。両顎の側歯列は小型の犬歯状。上顎の前端に3-6本の長い犬歯状歯が (KAUM-I. 160157, 162653, 189285 では3本, KAUM-I. 138125, 189284 では2対+1本, KAUM-I. 161455, 222997 では3対), 下顎の前端には1対の犬歯状歯がある。鰓耙は1-2尖頭。肛門は楕円形。体腹縁はなめらかで骨質隆起を欠く。第1背鰭起部は鰓蓋後端よりわずかに前にある。第1背鰭基底後端は肛門のほぼ直上, またはそれよりわずかに後方に位置する。第2背鰭起部は臀鰭起部の直上, またはそれよりわずかに前方に位置する。胸鰭基底上端と下端はそれぞれ第1背鰭第1棘基部直下と, 第1背鰭第2棘と第3棘基部の中間地点の直下にある。胸鰭後端は第1背鰭第6棘と第7棘基部の中間地点の直下に達する。腹鰭を欠く。尾鰭は二分形。側線は2本あり, 第1背鰭第5-6棘基部直下で分枝する。上方の側線は分枝後, 体背縁に沿って走り第2背鰭基底後端を超える。下方の側線は分枝後, 体側下方を上下に波打ちながら尾鰭基底の直前に達する: KAUM-I. 138125 では第1背鰭第12棘直下から第2背鰭第1棘にかけて, わずかに凸型に波打った後, 緩やかに上方にカーブを描き尾鰭基底直前まで達する。KAUM-I. 160157 は背鰭第15棘基部直下までは下方にカーブを描き, 第1背鰭第15-17棘基部直下で凸型に波打った後, ゆるやかに上下しながら尾鰭基底直前まで達する。KAUM-I. 161455 は第1背鰭第12棘基部直下までは下方にカーブを描き, 第1背鰭第12-14棘基部直下で凸型に波打った後, ゆるやかに上下しながら尾鰭基底直前まで達する。KAUM-I. 162653 は第1背鰭第14棘基部直下までは下方にカーブを描き, 第1背鰭第14棘基部から第2背鰭第1棘基部直下で大きく凸型に波打った後, ゆるやかに上下しながら尾鰭基底直前まで達する。KAUM-I. 189284 は第1背鰭第10棘基部直下までは下方にカーブを描き, 第1背鰭第10-12棘基部直下で凸型に波打った後, 第1背鰭第17棘基部から第2背鰭第1棘基部まで再び凸型に波打つ。その後, ゆるやかに上下しながら尾鰭基底直前まで達する。KAUM-I. 189285 は第1背鰭第9棘基部直下までは下方にカーブを描き, 第1背鰭第9-11棘基部直下で凸型に波打った後, 第1背鰭第16棘基部から第2背鰭第1棘基部まで再び凸型に波打つ。その後, ほぼ直走して尾鰭基底直前まで達する。KAUM-I. 222997 は第1背鰭第14棘基部直下までは下方にカーブを描き, 第1背鰭第14-16棘基部直下で凸型に波打った後, ゆるやかに上下しながら尾鰭基底直前まで達する。背鰭と臀鰭の後方には小離鰭がそれぞれ2個ある。鱗域は小さく, 体側後半から尾柄にかけての範囲のみ覆われる。

色彩 生鮮時 (Fig. 3) 一体は一様に銀褐色で, 体背縁は黒みがかかる。第1背鰭は白色半透明で, 上縁が黒色を帯びる。第1背鰭第1-3棘間の鰭膜の上端付近に黒色斑をもつ。胸鰭は銀白色で, 尾鰭は薄い黒色。その他の各鰭は白

色半透明。

分布 本種はナザレスバンクと, 日本, スマトラ島, およびオアフ島に至るインド・太平洋に分布し (Parin, 1989; Nakamura and Parin, 1993; 畑, 2024), 日本国内においては, 三重県熊野灘, 与論島, および九州パラオ海嶺から記録されている (中坊・土居内, 2013; 岡本, 2014, 2019; 荻野・松沼, 2018; 笹木, 2025)。また, 東京都島しょ農林水産総合センターホームページ内の「珍魚採集報告 (URL)」において, 八丈島から得られた本種の1個体が紹介されている。本研究により, 新たにトカラ列島平島・横当島, 奄美大島, および沖縄島における本種の分布が確認された。

備考 記載標本は下方の側線が体側下方に伸び, 波打つこと, 側線が第1背鰭第5棘と第6棘基部の直下で分枝し, 上方の側線が第2背鰭後端を越えて伸びること, 体側後半から尾柄にかけての鱗域が狭いこと, 眼は大きく, 頭長の25.0%以上であることが Parin (1989), Nakamura and Parin (1993), および中坊・土居内 (2013) の示したオオメカゴカマス *Rexea nakamurai* の特徴と一致したため本種に同定された。

オオメカゴカマスの識別的特徴として, 下方の側線が体側下方に伸び, 波打つことが挙げられるが, 本研究で報告された標本において, 下方側線の後部の形状に変異がみられた (「記載」の項を参照)。また, 同一個体であっても右体側と左体側で側線の形に違いがみられた (KAUM-I. 189284, 189285: 左体側では2度凸型に波打つものに対し, 右体側ではそれぞれ第1背鰭第9-11棘基部直下と第1背鰭第13-15棘基部直下で一度凸型に波打つ)。しかしながら, これらの標本は「備考」の冒頭で示したオオメカゴカマスの特徴 (上方の側線の後端が第2背鰭後端を越える, 眼径が頭長の25.0%以上など) をもつことから本種に同定され, 各標本の下方側線の形状にみられる相違は種内変異であると考えられる。

オオメカゴカマスの国内における記録は「分布」の項において記述した通りである。そのため, 本研究の7標本はそれぞれトカラ列島, 奄美大島, および沖縄島からの初めての記録となる。

謝 辞

神奈川県立生命の星・地球博物館の和田英敏氏には文献の調査にご協力いただいた。鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアの皆さまには, 標本の作製, 撮影, および登録においてご協力いただいた。Ichthy 担当編集委員の外山太郎氏と匿名の査読者には原稿に対して適切な助言をいただいた。以上の方々には謹んで感謝の意を表す。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の

一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海
事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS
科 研 費 (20H03311・21H03651・23K20304・24 K02087)、
JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形
成型 (CREPSUMJPJSCCB20200009)、文部科学省機能強
化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル
教育研究拠点形成」、および鹿児島大学のミッション実現
戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性
保全」と「地方創生」の革新的融合モデル)の援助を受けた。

引用文献

- 動物命名法国際審議会. 2005. 国際動物命名規約 第4版. 日本語版 [追補]. 国立科学博物館, 東京. xviii + 136 pp.
- 畑 晴陵. 2024. クロタチカマス科, pp. 158–161. 岡本 誠・本村浩之 (編) 日本の深海魚図鑑. 山と溪谷社, 東京.
- Hata, H. and H. Motomura. 2016. First record of the snake mackerel *Epinnula magistralis* (Perciformes: Gempylidae) from the Tokara Islands, Japan. *Fauna Ryukyuan*, 30: 11–15.
- Ho, H.-C., Y.-N. Cheng, Y. Su, Y.-C. Hsu and J.-F. Shyu. 2025. New record of the large-eyed sackfish, *Neoepinnula minetomai* (Actinopterygii, Scombriformes, Gempylidae), from western Taiwan. *Acta Ichthyologica et Piscatoria*, 55: 341–347.
- Ho, H.-C., H. Motomura, H. Hata and W.-C. Jiang. 2017. Review of the fish genus *Epinnula* Poey (Perciformes: Gempylidae), with description of a new species from the Pacific Ocean. *Zootaxa*, 4363: 393–408.
- Ho, H.-C., H. Motomura, H. Hata and W.-C. Jiang. 2022. *Epinnula rex* nom. nov., a replacement name for *Epinnula pacifica* Ho, Motomura, Hata & Jiang, 2017 (Teleostei: Gempylidae) *Zootaxa*, 5141: 199–200.
- Ho, H.-C., and W.-S. Yee. 2012. Note on *Epinnula magistralis* Poey, a genus and species new to Taiwan (Perciformes: Gempylidae). *Platax*, 9: 61–66.
- 本田康介・瀬能 宏・和田英敏. 2024. 相模湾産魚類目録 (改訂). 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 53: 127–218.
- Hubbs, C. L. and K. F. Lagler. 1958. Fishes of the Great Lakes region. *Bulletin of Cranbrook Institute of Science*, 26: 1–213, pls. 1–44.
- 甲斐嘉晃・御所豊穂. 2025. 紀伊大島樫野・定置網の魚. 弁天前定置水産株式会社, 串本・京都大学フィールド科学教育研究センター, 京都. 112 pp.
- Kamohara, T. 1938. Gempylidae of Japan. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 17: 45–50.
- 久保喜計・川端 青・朝井俊亘・花崎勝司・武内啓明・奥村大輝・山野ひとみ・細谷和海. 2012. 熊野灘で操業する沖合底曳網漁で得られた魚類. *近畿大学農学部紀要*, 45: 193–239.
- Matsubara, K. and T. Iwai. 1952. Studies on some Japanese fishes of the family Gempylidae. *Pacific Science*, 6: 193–212.
- 三澤 遼・木村克也・水町海斗・服部 努・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・永尾次郎・柴田泰宙・遠藤広光・田城文人・甲斐嘉晃. 2020. 東北太平洋沖における着底トロールで採集された魚類の分布に関する新知見. *魚類学雑誌*, doi: 10.11369/jji.20-023 (Oct. 2020), 67: 265–286 (Nov. 2020).

- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Myers, R. F., D. R. Burdick, B. C. Mundy, S. J. Lindfield, B. Tibbatts and T. J. Donaldson. 2025. New and recent records of fishes from the Mariana Islands, western Pacific Ocean. *Journal of the Ocean Science Foundation*, 42: 15–90.
- 中坊徹次・土居内龍. 2013. クロタチカマス科, pp. 1640–1647, 2221. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 東京.
- 中村 泉. 1984. クロタチカマス科, pp. 218–219. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編) 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- Nakamura, I., H. Fujii and T. Arai. 1983. The gempylid, *Nesiarchus nasutus* from Japan and the Sulu Sea. *Japanese Journal of Ichthyology*, 29: 408–415.
- Nakamura, I. and N. V. Parin. 1993. FAO species catalogue. Vol. 15. Snake mackerels and cutlassfishes of the world (families Gempylidae and Trichiuridae). An annotated and illustrated catalogue of the snake mackerels, snoeks, escolars, gemfishes, sackfishes, domine, oilfish, cutlassfishes, scabbardfishes, hairtails, and frostfishes known to date. FAO Fisheries Synopsis No. 15: i–vii + 1–136.
- Nakayama, N., Y. Kimura and H. Endo. 2014. *Neoepinnula minetomai*, a new species of sackfish from off Kuchierabu-jima Island, southern Japan (Actinopterygii: Gempylidae) *Ichthyological Research*, doi: 10.1007/s10228-014-0446-3 (Nov. 2014), 62: 320–326 (Apr. 2015).
- 荻野 星・松沼瑞樹. 2018. 三重県熊野灘から得られたオオメカゴカマス *Rexea nakamurai* (クロタチカマス科) の記録. *Nature of Kagoshima*, 45: 27–31.
- 岡本 誠. 2014. クロタチカマス科, pp. 578–579. 本村浩之・松浦啓一 (編) 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 岡本 誠. 2019. クロタチカマス科, pp. 396. 本村浩之・萩原清司・瀬能宏・中江雅典 (編) 奄美群島の魚類図鑑. 南日本開発センター, 鹿児島.
- Parin, N. V. 1989. A review of the genus *Rexea* (Gempylidae), with descriptions of three new species. *Journal of Ichthyology*, 29: 86–105.
- Roberts, C. D. and A. L. Stewart. 1997. Gemfishes (Scombroidei, Gempylidae, *Rexea*) of New Caledonia, southwest Pacific Ocean, with description of a new species. *Résultats des Campagnes MUSORSTOM*, 17: 126–141.
- 笹木大地. 2025. クロタチカマス科, pp. 201–204. 木村清志・笹木大地 (編) 美し国の魚たち 三重県の魚類図鑑. 木村清志, 伊勢.
- Stewart, A. L. 2015. Family Gempylidae, pp. 1602–1615. Roberts, C. D., A. L. Stewart and C. D. Struthers (eds.) *The fishes of New Zealand*. Vol. 4. Te Papa Press, Wellington.
- Tea, Y. K., T. L. Sih, F. Walsh, T. Bennett, L. A. Rocha, G. Bardout, A. Hay, K. Parkinson, S. Reader, I. J. Riley, J. J. Pogonoski, J. W. Johnson, G. I. Moore, A. C. Gill, G. F. Galbraith, B. J. Cresswell, A. S. Hoey, B. W. Frable, B. P. Brooke and R. J. Beaman. 2025. New records of fishes from the Coral Sea Marine Park, Australia. *Coral Reefs*, 44: 1227–1273.
- 山田和彦・高橋周佑・工藤孝浩. 2020. 東京湾外湾における特筆すべき魚類の記録. *観音崎自然博物館研究報告 たたらはま*, 24: 60–63.